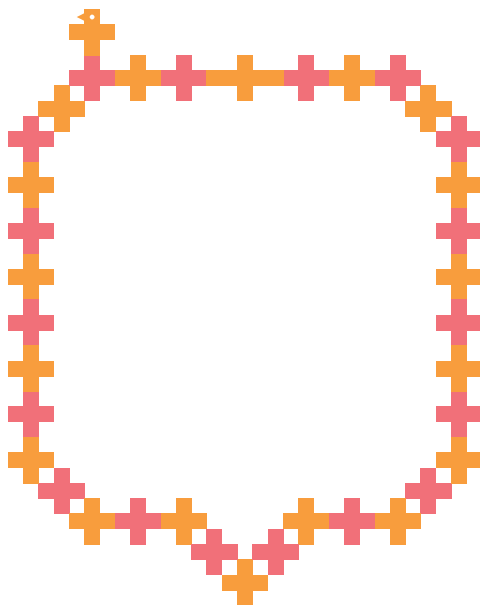
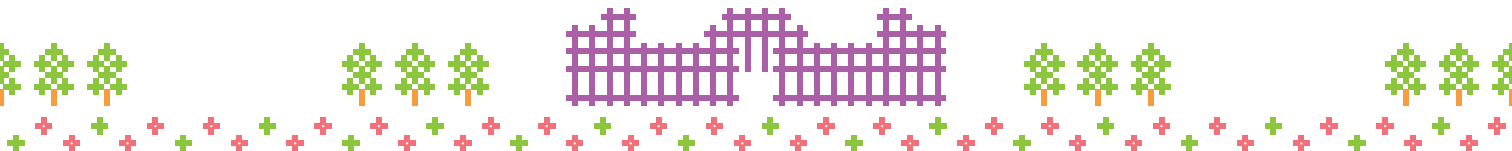




interview series

vol. 06 > 09



INTERVIEW

Exploring the new relationship
between community and museum

インタビュー・シリーズ

Insight on Site

地域社会とともにあるミュージアムの現場に学ぶ

インタビュー・シリーズは、日々地域社会のさまざまな主体と「対話」し、地域課題に「寄り添う」北海道内各地のミュージアム学芸員およびミュージアムに携わる関係者を対象に、個々の課題やそれに対する取組みに関する知見を集めていくという企画です。

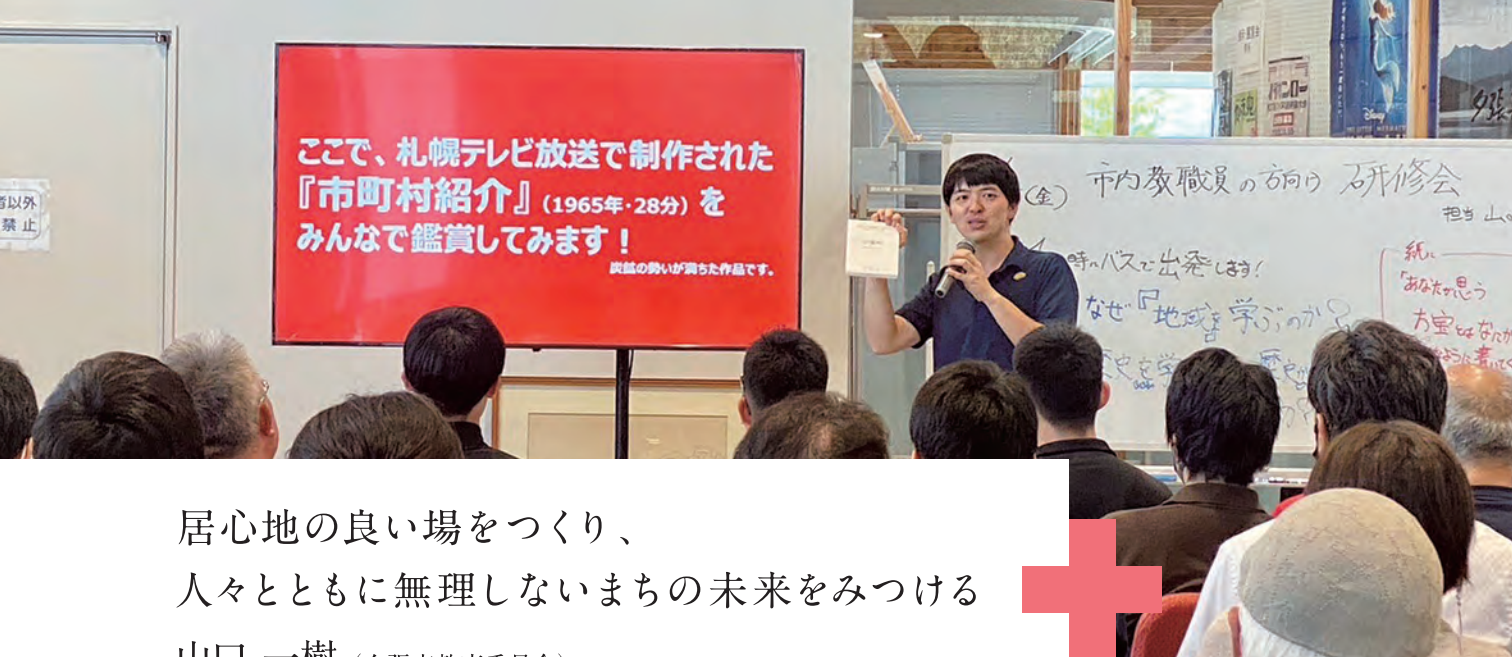
インタビューの成果は、動画コンテンツ、

冊子のインタビュー集、ウェブサイトを通して情報を発信し、

今後の事業においてフィードバックしていきます。

contents

- ✚ Vol.06 居心地の良い場をつくり、
人々とともに無理しないまちの未来をみつける
取材先：山口一樹（夕張市教育委員会）
報告者：卓彦伶 04
- ✚ Vol.07 地域の自然と人に寄り添い、
ミュージアムのソフトパワーを積み上げる
取材先：山田良輔（札幌市市民文化局 文化部文化振興課 博物館担当係長）
山崎真実（札幌市博物館活動センター）
報告者：卓彦伶 06
- ✚ Vol.08 地域を見据え、誰もが楽しめる水族館の価値を創出
取材先：梅津真平（おたる水族館）
報告者：卓彦伶 10
- ✚ Vol.09 ミュージアムグッズを通じて、
地域とミュージアムの架け橋となる
取材先：大澤夏美（ミュージアムグッズ愛好家）
報告者：卓彦伶 14



居心地の良い場をつくり、 人々とともに無理しないまちの未来をみつける

山口 一樹（夕張市教育委員会）

＋ まちの機能を集約した新たな拠点となる 複合施設「りすた」

夕張市はかつて炭鉱都市として栄え、採掘場を中心に各地域で集落が形成されていたが、炭鉱産業の衰退後、残った住民が中心に集まり、コミュニティを再構築するコンパクトシティ化の試みが行われている。その中心に位置する拠点複合施設「りすた」は、夕張市の文化・行政機能を集約し、市民の交流や学び合いの場として位置づけられ、2020年にオープンした。今回のインタビューでは、「りすた」で勤務する山口一樹学芸員にお話を伺った。地域の住民が積極的に学び続けられるようにサポートする事業を実施し、旧美術館の収蔵品を活用した展示の企画・運営や、寄贈物の受け入れなどの活動を手がけている。同時に、地域の炭鉱労働に携わった方々から話を

聞き、オーラルヒストリーとして残す動画制作プロジェクトも進めている。

夕張市は人口減少、少子高齢化、財政難などの課題を抱えている。特に人口約7000人のうち3500人が高齢者という現状のなか、山口氏は高齢者に対して、「やっぱり納得する人生を自分なりに意味付けられるというのはすごく大事」という思いを語った。地域の資料や旧美術館の収蔵品を活用して、地域の人びとが、作品を通して自分の人生を振り返りながら、無理せずに前向きに生きがいを持って過ごせるきっかけとなる事業を展開している。

＋ 旧美術館の収蔵品を通じて 大切にされる人々の「心のつぶやき」

夕張市の旧美術館は2012年2月に積雪で倒壊し、その後

市の財政難により再建されることなく、収蔵されていた資料は夕張市教育委員会に引き継がれた。美術館が閉館して以降、収蔵庫に眠っていた収蔵品に対して、元美術館長の上木和正氏と山口氏は「地域に元々あったものにちゃんと光を当てて、いま生きている人たちと共有したい」という思いから、美術館の収蔵作品を再び地域の人々の前で展示する企画を立ち上げ、2022年8月に「りすた」で旧夕張市美術館収蔵作品展を実現させた。展示では、炭鉱ズリ山の風景や坑内で働く人々の様子を描いた絵画が観られ、夕張市出身の高齢者からは懐かしい思い出がよみがえったとの声が上がリ、若い世代からは夕張市にこんな歴史があったのかと驚く声も聞かれたという。

山口氏はアートや美術から生まれた効果は評価されにくいとしながらも、地域を構成する個人に目を向け、「地下水が地域を潤してくれるように、地域の中にいろんな人を育てていくということはあると思う」と語った。さらに、ミュージアムという場所で作品に触れて、対話することは、「いま住んでいる人にとって大きな学びになったり、大きな実感があったりするかもしれない。人々のこれまでの歩みを振り返られるきっかけになればいい」とし、ミュージアムとアートを通じて人々に立ち止まる余裕を与える可能性も口にした。

「りすた」に来館する人々、展覧会を訪れる人々、たまたまそこに居合わせた一人ひとりが、作品との出会いから生まれた「ひとり言」あるいは「心のつぶやき」を大切にできる場になることが何かしら個人に寄与している。こうすることで、地域の未来を考えるとときに、自分たちの素直な気持ちを大切にできる状態でいられ、より良いものをみんなで話し合いをしながら合意形成をし、いい

ものを作っていくということを期待している。

山口氏は現在、「りすた」でタイムカプセルの企画を考えているとのこと。人口減少が進む中で、幅広い世代と一緒に参加し、タイムカプセルを埋めることが、現在いる住民たちが一緒に数十年後の夕張の姿を想像する貴重な機会になると期待を寄せている。

（執筆：卓 彦伶）
取材日：2023年1月30日





地域の自然と人に寄り添い、 ミュージアムのソフトパワーを積み上げる

山田 良輔（札幌市市民文化局 文化部文化振興課 博物館担当係長）

山崎 真実（札幌市博物館活動センター）

札幌市の自然史博物館の準備室として、
認知度を上げていく

札幌市博物館活動センターは、2001年に札幌市博物館整備推進方針に基づいて設置された。いまだ実際の博物館ができる段階ではないものの、博物館のソフトの部分を中心に進め、札幌市の自然史博物館として機能している。その後、2015年に作成された「(仮称)札幌博物館基本計画」では、博物館の使命を「札幌市民としての郷土への愛着と誇りを育む」、「創造性あふれる人材の育成」、「自然と人の観点からまちづくりに貢献」の3点と定め、これを達成するために市民と共に札幌の自然や人との関わりを探索することを目標としている。札幌市の自然史博物館の準備室として位置づけられている博物館活動センターの現状と今後への展望について、博物館担当係長の山田

良輔氏と学芸員の山崎真実氏にお話を伺った。

山田氏は、札幌市の財政状況と社会情勢を考慮しながら、まずは市民に札幌市博物館活動センターを知ってもらうことに注力しているという方針について語ってくださった。そのためには、札幌の自然や研究成果を市民に紹介することが必要になる。例えば新型コロナウイルスの影響から再開したさっぽろ雪まつりに合わせ、2023年2月4日～5日の2日間、札幌駅前通地下歩行空間北3条交差点広場でイベント「すべては、つながっている。Road to the Sapporo Museum」を開催し、札幌市南区小金湯で発見された全長14mのセミクジラ化石の完全復元骨格標本の初公開や、札幌の植物や昆虫の標本、サッポロカイギュウなど札幌の自然に関する展示、学芸員のトークイベント、ワークショップなどを行った。このように研究成果を

広く市民に伝えることが、博物館活動センターの知名度向上に繋がると考えている。

現状として、博物館活動センターには植物専門と古生物専門の2名の学芸員しか在籍しておらず、博物館単体では外部への教育普及活動は限界がある。今後は外部との連携を強化し、学校や企業など幅広い分野の活動に乗って、学芸員がさまざまな場面で顔を出して発信する機会を増やしていくと山田氏が語った。



草の根的に、 市民との関係性を築き上げる

植物専門の学芸員・山崎氏は、博物館活動センターの市民向けの教育普及活動や展示の企画、来館者の対応など全体的な運営を担当している。夏場には札幌市内の風穴地という夏場でも冷たい風が出てくる地形に生息する植生植物の調査をしたり、札幌市内の絶滅危惧種の植物を調査したりという野外調査をしている。

博物館活動センターは組織的な体制がまだ整っておらず、学芸員とのつながりで、長年標本整理に協力してきたボランティアの市民の存在が博物館にとって貴重な存在



であるという。山崎氏が担当する植物分野では、西岡公園事務所で企画された植物の調査員養成講座の講師を務めたことがきっかけとなり、そこで養成された調査員は普段は西岡公園を拠点に緑化協会の登録ボランティアとして活動しているが、博物館活動センターでも人手が足りないという状況を知り、10年以上にわたり毎年冬に博物館活動センターに標本の整理を手伝っている。

近隣の小学校では、子どもたちが先生に掛け合い、「博物館クラブ」が結成されたこともあったという。当時の活動では、博物館に集まったクラブのメンバーが指のレプリカを作ったり、学芸員の仕事を体験したりするなど、様々な活動が行われた。現在は残念ながら博物館クラブが自然消滅のような状態にあるとのことだが、山崎氏は、「活動センターが地域に溶け込み、リピーターになってくれる子どももいるので、博物館クラブの活動がなくても子どもたちはファンのような感覚で放課後に博物館に来てくれている」という地域における新たな手応えを見出した。実際、博物館では、学校で居場所がなく、共通の興味を持てる友達がいないと感じていた子どもが入り浸っていたケースもあったそうだが、その子は現在では大学生

になっていて、理学系の学部に進んだとのことである。博物館活動センターは子供にとっても、居心地の良いサードプレイスの存在になっていることが伺えた。

市民参加型で行った札幌市内のセミ分布調査は、札幌市内におけるセミの種類や分布、生息・発生状況を明らかにするために、2008年～2010年と2019年～2020年にかけて、市民に調査員になってもらい、自宅周辺や公園などでセミの抜け殻を集め、博物館に提供してもらった。特に、2回目の調査期間2019年～2020年の2年間で162人が調査員として登録し1306個のセミの抜け殻が集まった。1回目の調査が行われた2008年から2010年の調査員の数が増加し、収集された数も大幅に増えたことが確認されたという。山崎氏は、この2回の分布調査を通じてできた市民との緩やかなネットワークを有効に繋いでいきたいという期待を語った。



また、札幌市文化庁全体の事業として、「学校DEカルチャー」という事業の中で、博物館は「デリバリーミュージアム」という活動を担当している。デリバリーミュージアムを希望する学校に学芸員が訪れ、応募した学年や学校が位置する地域の自然環境に合った話題をするなど、セミオーダーメイドの授業を提供している。山崎氏は、年間通じて博物館と学校と緊密な連携を通じたカリキュラムの構築を目指しているが、実現には様々な課題が伴っているという。「デリバリーミュージアム」では、当初の設定では年間2校までの応募を受け付ける予定だったが、現状では予定以上の応募があり、全ての学校の要望に応えるためにできる限り柔軟に対応しているが、学芸員2名だと限界がある。山崎氏は「博物館独自の事業として独立していけたらいいな」と今後に向けて展望を話した。

(執筆：卓 彦伶)
取材日：2023年2月17日





地域を見据え、 誰もが楽しめる水族館の価値を創出

梅津 真平（おたる水族館）

来館者の7割が北海道内から、 地域志向の水族館

おたる水族館は、約250種5000個体もの海の生き物が飼育されている。特にトドやアザラシ、セイウチなどの鯨脚類は、日本一の飼育頭数を誇っている。また、おたる水族館はニセコ積丹小樽海岸国定公園内に位置し、海に接した自然の地形の中にあり、「海獣公園」エリアでは、海を仕切っただけのプールでアザラシやトドが日本海と接しながら生活している。今回のインタビューでは水族館の営業に関わる業務全般の責任者である梅津真平氏がお話を聞かせてくださった。

おたる水族館について、梅津氏は、「ここでは、近くからポンプで海水を引き上げて使用しているので、動物たちは健康的な生活をしている。建物はものすごく古くて、

立派じゃないんですけども、水だけには恵まれている水族館なんです」と笑顔で語ってくれた。おたる水族館には、年間に約40万人が来館しているが、そのうち約7割が北海道内から、さらにそのうちの8割が札幌を中心とした道央圏からの来館者である。幼稚園から高校までの学校団体の利用も多く、特に小学校が全体の4割を占めているという。新型コロナウイルス感染症の流行前には、学校団体を対象にバックヤードツアーを実施し、飼育員がおたる水族館の裏側について説明していた。新型コロナウイルス感染症の期間中は、バックヤードツアーの代わりに、生き物の観察や謎解きゲームを行ったあと、飼育員が解説をするという教育プログラムに変更している。



水族館から地域に ひろがっていくための試み

アザラシの赤ちゃんがゴマ大福に似ているという飼育員のアイデアから、小樽の老舗和菓子屋に提案して実現したコラボ商品「ゴマフ大福」がある。最初は企画が受け入れられるかどうか不安だったが、何回か説明を行った結果、実現することができたとのこと。この「ゴマフ大福」は現在お店の人気商品になっているという。梅津氏が、「こちらから提案をさせていただかないと、なかなか向こうからいろんな提案が来るってことはほとんどないので、できれば地元の企業が盛り上がるような提案をこちらからさせていただいて、ひいてはおたる水族館の宣伝になればいいのかなというような認識でやっています」と語るように、地域の企業に対して積極的に提案していくことで、水族館の中に完結せずに地域にひろがっていく試みを続けている。

また、おたる水族館は旅行業登録もしており、おたる水族館だけではなく、小樽市内のさまざまな観光施設を巡るツアーを企画している。2022年には約400人がツ

アーに参加したという。具体的には、飼育員が水族館の見学やイルカのパフォーマンスを見せるほか、時期によってはトドやアザラシのトレーナーとの体験もできる。また、小樽の歴史文化に関する内容として、水族館のそばにある小樽市鯨御殿を案内したり、小樽市総合博物館の学芸員から展示解説を受けたり、小樽運河クルーズの乗船や天狗山への訪問など、多様なパターンで小樽市内のツアーを企画している。梅津氏は、ツアー参加者のアンケートから、飼育員から生き物の説明を受けることができることや、普段経験できないトレーナー体験、小樽市総合博物館の展示解説で小樽の歴史について学ぶことができたなどの回答を得て、手応えを感じている。



「音のない水族館」、 誰もが楽しめる場づくりに挑戦

「音のない水族館」は聴覚過敏障害の子供を持つ母親から、子供に大好きな水族館でのイルカショーを体験させることができないかという相談メールから始まった取り組みである。

相談を受け水族館はすぐ館内で合意し、実現に向けて

動き出したが、具体的にはどうすれば音のない環境を作り出せるか、職員が頭を悩ませたという。聴覚過敏の子供を持つ母親や関連するNPO法人からのフィードバックを受けながら進めていくことになり、館内のBGMを消すこと以外に、イルカショー、アザラシ、トドショーについては、音楽や司会、トレーナーの案内を省き、代わりにパネルやボードを使って進行を説明することにした。

また、「音のない水族館」の開催日に、ホームページやSNSでの事前告知や入館する前に館内に音がないことを伝えることで、来館者の理解を得た上で入場してもらった。その結果、苦情やクレームはなく、来館者のアンケートからは、「生き物の息遣いや動きが音楽や他の音で消されることなく感じられた」という肯定的な意見が寄せられた。

水族館内で聴覚過敏の子供だけを対象にした日を設けることについての議論もあったそうが、梅津氏は、聴覚過敏の子供が一般の来館者と一緒に水族館を楽しむことで、子供の自信につながるという結果も見られたため、あえて区別せずに一緒に水族館体験をすることが重要であると語った。

最後に、梅津氏は水族館も社会教育施設として多様なニーズに対応していくことで、誰もが楽しめる、包摂的な水族館を目指していくための活動を今後も続けていくと語った。

(執筆：卓彦伶)
取材日：2023年2月28日



音のない水族館

令和4年7月2日(土)・10月1日(土)
13時30分〜17時00分

**初めての試み
『音のない水族館』**

おたる水族館では聴覚過敏の障がいを持った方が水族館で快適にお過ごしいただけるよう『音のない水族館』を実施いたします。

聴覚過敏の方は、何でもない音が大きく聞こえる、耳に響くなど聞こえ方に障がいがあり、音が耳に入ることですぐに苦痛を感じてしまいます。

このような方々にも安心して水族館の生きものたちに接していただけるよう、当日は館内のBGMやイルカショー・トドショーで流されるさまざまな音を消し、ショー司会についても声を発しない状態で見えていただけるよう工夫いたします。

音のない状態でおこなうパフォーマンスがこれまでにはない生きものたちの動きや呼吸音までお客様に伝わるよう努力してまいります。

さまざまな方に水族館を楽しんでいただくための取り組みとなりますので、皆さまのご理解・ご協力をお願いいたします。

なお、館内では外見からは分からなくても援助や配慮が必要な方のマーク（ヘルプマーク）についての広報ポスターを掲示していますので、ぜひご覧ください。



ミュージアムグッズを通じて、 地域とミュージアムの架け橋となる

大澤 夏美（ミュージアムグッズ愛好家）

+ ミュージアムグッズ愛好家

大澤氏はミュージアムグッズの面白さと魅力を伝えるとともに、ミュージアムグッズを通じてミュージアムと人々をつなぐ「ミュージアムグッズ愛好家」として活動している。大学時代はデザインを専攻していた大澤氏は、学芸員実習を通じて、博物館学に触れ、ミュージアム業界でのキャリアを模索し始めたという。修士論文ではミュージアムグッズをテーマに執筆した。修士課程を修了した後、会社員として働くものの、ミュージアムグッズに対する情熱を断ち切れず、ミュージアムグッズを仕事にするための道を切り開く決意を固めた。その中で、博物館の学芸員やミュージアムグッズを制作する企業に就く道もあったが、より広い視野を持ち、業界全体を見渡

せるように、2017年から「ミュージアムグッズ愛好家」として活動を始めた。最初に取り組んだ活動はミュージアムグッズの専門誌を立ち上げたことであった。その第1号では札幌市内のミュージアムの協力を得て、ミュージアムグッズの紹介する特集を自費で出版した。その後、北海道外のミュージアムにも展開を広げて、現在、大澤氏が手がけるミュージアムグッズの専門誌は5号まで発行されている。さらに、これらの実績をもとに、出版社に企画を持ち掛け、ミュージアムグッズをテーマにした商業出版も実現した。この経験から、大澤氏は「待っているだけじゃだめだと思って、待ちの姿勢じゃなくて自分からどんどん行かなきゃというのはこの愛好家の活動として大事な」という自身の姿勢を語った。

+ ミュージアムと地域を結び付ける ミュージアムグッズの可能性

大澤氏は、ミュージアムグッズが博物館と地域の結びつきを担う一翼になることの可能性について、地域の伝統工芸、地域産業とミュージアムが連携して商品を開発した事例を話してくださった。

例えば、八尾市立しおんじやま古墳学習館では、歯ブラシをミュージアムグッズとして展開している。来館者の中にはなぜ歯ブラシなのか、という疑問をもつ人もいるが、実は八尾市は、日本一の歯ブラシの生産地であり、全国の生産量の40%を占めている。歯ブラシは地域を代表する産業の一つなのだ。来館者がミュージアムグッズを通して地域の産業の歴史を知ることができるという点について、大澤氏は「ミュージアムグッズは、地域を映す鏡としての役割が今後ますます重要になる」と述べていた。

また、群馬県立歴史博物館が地域の事業者との連携によって開発した埴輪クッキーの事例も紹介された。このグッズは、開封すると表面が砂糖で覆われており、付属のブラシで掃くと埴輪の形のクッキーが現れる。さらに、埴輪クッキーは実際の博物館の収蔵品と同じ箇所が欠けており、チョコペンを使って修復することができる。実際に埴輪の発掘・修復を楽しむことができるということで話題になったそうだ。このグッズの開発では、ミュージアムが埴輪に関する専門的なアドバイスをしながら、事業者との密接な話し合いで実現できた。この事例から、ミュージアムグッズはミュージアムが地域に開かれる重要な糸口になると話した。

最後に、大澤氏は、ミュージアムが持っている資料とコンテンツに興味を持つクリエイターが最近増えてきて

いることを話し、ミュージアムと多様な主体との関係を築いていくために、自身のような「心のある外の人間」が増えることで、ミュージアムをより知ってもらえることを期待している。

（執筆：卓彦伶）
取材日：2023年3月3日



謝 辞

北海道大学大学院文学研究院では、文化庁「大学における文化芸術推進事業」の助成を得て、
「プラス・ミュージアム・プログラム」に取り組み、地域の文化発信力の底上げを目指しています。
本インタビュー・シリーズはその一環として実施されたものです。
インタビュー取材や写真提供にご協力いただきました下記の皆様に厚く御礼申し上げます。

山口 一樹(夕張市教育委員会)	梅津真平(おたる水族館)
山田 良輔(札幌市市民文化局 文化部文化振興課)	大澤夏美(ミュージアムグッズ愛好家)
山崎 真実(札幌市博物館活動センター)	

文化庁 令和5年度 大学における文化芸術推進事業
ミュージアムにおける異分野との「対話」と「寄り添い」を通じた人材育成事業

プラス・ミュージアム・プログラム インタビュー・シリーズ2

『Insight on Site 地域社会とともにあるミュージアムの現場に学ぶ』

主 催 北海道大学大学院文学研究院
共 催 北海道大学総合博物館
助 成 文化庁「令和5年度 大学における文化芸術推進事業」

発行日 2024年2月26日
発 行 北海道大学大学院文学研究院
編 集 卓 彦伶 今村 信隆 佐々木 亨
執 筆 卓 彦伶
アート・ディレクション 岡田 善敬
デザイン・制作 岡田 善敬 得能 涼加
印 刷 札幌大同印刷株式会社

